
たたた侍

勝田圭

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たたた侍

【Nコード】

N7374V

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

いつからだろう。僕の家に、知らない何者かが住み着くようになったのは。それは決して僕に姿を見せない。むこうさんも別に姿を隠すつもりはないのかも知れない。でもとにかく、一瞬で通り過ぎてしまうものだから、姿を確かめようがないのだ。僕が気付いた瞬間には、もうドアの向こうを左から右へと通り過ぎてしまっているのだから。

ふと、何かの気配を感じた。

何かが、僕の背後をすつと横切った気がする。

いや、気がするじゃない。間違いなく、横切った。

今日始まったことではない。

いつからだろう。

僕の家には、知らない何者かが住み着くようになったのは。

それは決して僕に姿を見せない。

むこうさんも別に姿を隠すつもりはないのかも知れない。でもとにかく、一瞬で通り過ぎてしまうものだから、姿を確かめようがないのだ。僕が気付いた瞬間には、もうドアの向こうを左から右へと通り過ぎてしまっているのだから。

ドアの向こう……そう、分かったことがある。そいつは、僕がこの自分の部屋にいて、ドアを開けている時に限って現れる。

生きているというのならば、存在しているというのならば、それ以外の時だって存在しているのだろうが、少なくとも僕が気配を感じたことはない。

多分、人間だ。

いや、断言は出来ないけど、以前にちらりと、踵を見たことがある。袴姿のようだった。

僕は椅子に座り、じつとドアの向こうを見た。

実は出現ポイントさえ分かっちゃえば、チラチラ引っこりなしに現れているのではないか。そう思ったからだ。

五分、十分、時間が経ったが、それは現れなかった。

散らかった部屋の埃っぽさに、くしゃみをした瞬間であった。

ひゅっ

通った。

くしゃみで一瞬目を閉じてしまったが、しかし、はっきりと見た。

侍というのか、お奉行さんというのか、とにかく袴を着た、ちゃんまげ武士だ。

また僕は頑張ってみたが、五分、十分、十五分、現れる気配がない。

もしかしたら。

僕は、わざとくしゃみをしたみた。

たたっ

通った。

出現条件が分かった。

理屈は不明だが、とにかく、この部屋のドアを開けた状態で、僕がこの部屋でくしゃみをする、と、現れるのだ。現れるといつても、左から右へ一瞬で通り過ぎるだけだが。

確信を得るため、もう一度、くしゃみをしたみた。

たたっ

駆け抜けた。

間違いない。

この武士のような男 とりあえず侍としておこう 侍は、何故くしゃみで姿を現すのだろうか。

光の加減やら体調やらで何だかキラキラ光るものが見えることがあるが、もしかしたら単にそういうものなのだろうか。それと、僕の脳の動きの何かとが混ざり合って、あのようなものが見えるのだろうか。

僕は部屋を出た。念のため、きよろきよろ見回してみたが、どこにも侍はいない。そこでくしゃみをしたみたが、現れなかった。やはり、あの部屋の中でないと呼べないようだ。

山田の家に電話をかけた。すぐ近くに住む友人だ。

自分にだけ見えるものなのかどうか確かめようと思ったからだ。程なくして山田がやってきた。早速、僕の部屋へ入れた。

僕は山田に手短に事情を説明した上で、くしゃみをしたみせた。たたたたっ。

侍が駆け抜けた。

山田にも、その姿が見えたそうである。

ということは、少なくとも僕の幻覚ではないということだ。

そうすると、これはなんなのだろうか。

霊的なもの？

もつと物質的なエネルギー？

僕はもう一度呼んでみた。

ひゅっ

山田は手を叩いてよろこんだ。

実験することになった。山田の提案で、侍の通り道に小さな物を置いてくしゃみをしてみたところ、侍はタツと現れガツと蹴つまづいた。バランスを立て直すと、そのまま何もなかったかのように通り過ぎた。心なしか顔が赤くなっているような気がしたが。

山田もくしゃみをしてみた。

ひゅっ

通り過ぎた。

僕だけが呼べるわけではないようだ。

山田が面白がって何度もやっているうちに、ある法則性に気が付いた。ふえーっく、しょおおい、のようにゆっくりくしゃみをする。侍はゆっくり通り過ぎ、クシと素早くやると物凄い速度で通り過ぎるのだ。

通り過ぎる瞬間、山田が物を投げ付けたら、ボクシングのパーリングデフエンスのようにパシッとはたき落とされた。

通り過ぎる瞬間、山田が今度はエロ本を投げたら、パシッと受け取り、そのまま駆け抜けた。

山田が調子に乗ってあまりに何度も何度も呼び出すものだから、侍は多少息が上がってきたようだ。

山田が何度も障害物を置いて転ばせるものだから、だんだん、腕や顔などに擦り傷が出来てきていた。

僕はちよつと可哀相に思い、絆創膏を置いてやった。

くしゃみで呼び出すと、ひゅんと現れ、絆創膏を拾い、凄まじい速度でべたべたと貼り付け、駆け抜けて行った。

彼は一体どこから来てどこへ行くのだろう。

右に駆け抜けるのに、すぐ呼んでも左から現れるのは何故だろう。ゆっくりくしゃみをし、たつたとゆっくり通り過ぎて行く侍の首に、山田はパイナップルの空き缶をぶら下げた紐をかけた。

姿を消した瞬間に、またすぐにくしゃみで呼んだが、いま首にかけたばかりの空き缶がない。

僕と山田は部屋を出て探したが、どこにもその缶は見つからなかった。

侍はどこから来て、どこへ消えるのか。僕たちは想像した。

山田は良い考えがある、と僕のデジカメをいじり出した。

デジカメに長い長いビデオケーブルを繋ぎ、ビデオデッキに接続。ビデオデッキの録画をオンにすると、くしゃみで侍を呼んだ。

さっきの缶の容量で、山田はデジカメをぶら下げた紐を侍の首にかけた。

ざーーーーー。

テレビに映っていたデジカメの映像が消え、砂の嵐になった。

部屋を出てみると、デジカメから引っこ抜かれたビデオケーブルだけが床にだらりと伸びていた。

カメラ、高かったのに。

僕がくしゃみで呼ぶから、お前、抱き着いて侍をこっちに引っこ張ってこい。僕は山田にそういった。

そしてそれを実行した。

山田は侍をこちらへ引っこ張ってくるどころか、侍に抱き着いたまま、引っこ張られて行ってしまった。

それきり、山田は二度と戻ってくることはなかった。

といえば嘘になるか。

しばらくして、まったく予期もしなかった形で戻ってきた。

僕が変わりのデジカメを買って、部屋の中で試し撮りそしたとき

である。

シャッターを切ったと同時に、山田がドアの前を左から右へすつと横切ったのだ。

それからしばらくは気持ち悪くてデジカメを手にとることもなかったのだが、好奇心から久しぶりにシャッターを切ったところ、久しぶりであつたがためかは分からないが横切る山田の顔が、なんだか怒っているように見えた。なんだかいまにもこちらを振り向きそうに見えた。

それ以来、僕は毎日ここでシャッターを切っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7374v/>

たたた侍

2011年8月13日03時25分発行